



中国がわかるシリーズ 24 武韋の禍の実態（上）

ライフネット生命株式会社

代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

名君であった唐の太宗（李世民）が死去した後、太宗の後宮にいた宮女達は尼寺に入りました。その中に武照という女性がいました。太宗の子どもの第3代皇帝、高宗（649～683）は、652年頃、武照を還俗させ、自らの後宮に加えたのです（父の妻妾を子が受け継ぐのは、北方民族ではよくあるレヴィレートと呼ばれる風習です）。頭脳明晰で政治的センスに優れた武照は、たちまち、高宗の寵を得て655年に皇后となりました。660年には、2聖（高宗、武后）政治が開始されましたが、気の弱い高宗に代わって武后が実権を掌握したことは傍目にも明らかでした。

同じ660年、新羅は唐と結んで、百済を滅ぼしました。倭は、同盟国として百済の再興を図るべく、朝鮮半島に出兵しましたが、663年、白村江で、唐と新羅の連合軍に敗れました。軍事力では、唐の派遣軍に勝っていたようですが、倭には、新羅の名君、武列王のような国際情勢に明るい人材がいなかったのでしょう。

668年、唐は、遂に難敵高句麗を滅ぼし、その首都平壤に、安東都護府を置きました（高句麗の遺民は、698年、東北・吉林省に渤海を建国。渤海は新羅と緊張関係にあり、倭とは誼を通じました。渤海は、727年から919年まで33回の遣倭使を送っています。日本からは13回ですが、8世紀以降、回数の減じた遣唐使に代わって、渤海バイパスは、大陸の文物を吸収する貴重なルートとなりました）。

674年、今度は、唐と新羅が抗争を始めました。新羅は、倭との外交を重視し、低姿勢に出ました。7世紀後半の30年間には、双方で30回以上に及ぶ遣使の往来が記録されています。裏を返せば、唐の脅威は、それほど大きかったのでしょう。676年、唐は、新羅と争う愚を悟って、安東都護府を遼東に引き揚げ、朝鮮半島は新羅によって、統一されました。

唐と安定関係を結んだ新羅は、8世紀に入ると、倭とは疎遠になりました（この結果、遣唐使の渡海ルートは、新羅沿いの北路ではなく、五島列島から長江河口を目指す南路に変更されました）。もっとも、3国時代に比べれば、高句麗の旧領は、大半が放棄されたので、統一新羅の領土は、ほぼ半島部に限られました。新羅も渤海も倭も唐に朝貢し、東北アジアは、唐の時代は相対的に安定関係を持続したと言えます。新羅商人は、山東にも拠点を有して東アジアで活躍しました。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

679 年、唐はハノイに安南都護府を置きました。681 年、浄土宗を大成した善導が死去、善導の教えは、やがて、日本の法然や親鸞に受け継がれることになります。682 年、イルテリシュ可汗に率いられて、東突厥が復活しました(第 2 帝国)。東突厥の復活や渤海の建国などにより、唐の領域は縮小して、漢と似たサイズになりました。東突厥第 2 帝国は、遊牧民最初の纏まった史料である幾つかの碑文を残したことでも知られていますが、その盛期は約半世紀しか続きませんでした。